

令和7年度
一般選抜 小論文 出題の意図

問題文の出典：渡辺裕『校歌斉唱！ 日本人が育んだ学校文化の謎』、新潮社、
2024年、25～28ページ

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できているかを問うものである。

設問1

- 1) 設問の趣旨を的確に捉えているか。
- 2) 課題の在所を把握し適切に絞り込んでいるか。
- 3) 文章を整然とまとめ上げているか。

設問2

- 1) 設問の趣旨を的確に捉えているか。
- 2) 課題の在所を把握し適切に絞り込んでいるか。
- 3) 説得力をもって論じているか。
- 4) 文章を整然とまとめ上げているか。

※ この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

令和7年度 山形県立米沢女子短期大学

一般選抜 小論文 問題用紙

【問題】 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

校歌というジャンルは、日本に特有のものだとよく言われます。私もそう多くの国の状況を知っているわけではありませんが、少なくとも日本が明治以後、近代化にあたってモデルにしたような欧米諸国をみるかぎり、たしかに日本の校歌に相当するようなものはないように思われます。日本の場合には、まずどこの学校でも、それぞれ固有の曲が「校歌」として学校当局に公式に「制定」されて入学式や卒業式のような式典等の公の場で歌われるというのが普通ですが、少なくともそういう国は欧米諸国にはみあたりません。

もちろん、学校という組織にいろいろな形で歌が伴うというのは、何も日本だけの話ではありません。「学生歌 (student song)」と呼ばれるような、学生が集まって一緒に歌うような歌は、欧米の多くの学校にもみられますから、明治になって欧米の学校をモデルとして近代的な教育システムを作り上げた日本でもそのようなものが取り入れられたということ自体は不思議ではありません。しかし欧米諸国の場合、ほとんどの「学生歌」はその学校に固有の歌というわけではなく、多くの学校で共通に歌われるものですし、その学校だけで歌われているものがあるとしても、ほとんどは学生が自然発生的に歌うようになったものです。日本のように、学校側が公式に制定し、その制定記念の式典まで行われるというようなケースはまず考えられません。そういう意味では、「校歌」というジャンルは、まさに日本独特の「文化」であるということになるでしょう。

しかしそのことは、このジャンルが日本だけにしかない独自の文化的伝統の中から出てきたものだということを意味するわけではありません。たしかに「校歌」自体は、日本以外ではなかなか見られないかもしれませんが、それと似たような成り立ちの音楽は、欧米諸国にもその他の国にもいろいろな形でみられるからです。たとえば「国歌」です。もちろん校歌は学校単位の歌ですし、国歌は国単位の歌ですから、その規模感においては対照的ですが、その果たす役割はよく似ています。その共同体に所属する人々が、何かの機会に皆で声をそろえて歌うことによって、その共同体への帰属意識やメンバーたちの間の連帯意識を高める、そんな役割が期待されている歌であることは全く共通しています。国歌だけではありません。団体がつくられるところ、そのメンバーたちが歌うための歌がつけられるという発想は、まさに西欧諸国にこそ典型的にみられるものです。たとえばボーイスカウトのような団体では、歌集が用意され、何かの機会にそれを広げて歌うようなことが行われますし、そのように完全に組織化された団体でなくても、労働運動や市民運動に参加した人々が歌集を渡されて、その中の歌を皆で歌って氣勢をあげるようなことはしばしば行われます。それがこうした運動のシンボルになるようなことも少なくありません。

そのような「皆で声をそろえて歌う」ことで共同体を形作ったり、その維持・強化をはかったりするような歌は「コミュニティ・ソング (共同体歌)」と呼ばれています。「コミュニティ・ソング」の成り立ちは、18世紀後半から19世紀にかけて西欧諸国が市民社会へと移行し、近代的な共同体へと再編成されてゆく動きと深く関わっています。もちろん、人間が共同で作業するときなどに皆で歌を歌って心をひとつにする、というようなこと自体は、べつに近代になってはじまったことではありませんが、それが近代的な共同体のなかでのアイデンティティのあり方と結びついて組織化されることで、歌が団体のあり方と不可分になってゆくような動きは、まさにこの18世紀後半から19世紀にかけての西欧社会で生じたものでした。国歌にしてみても、国という存在はべつにこの時代にはじまったものではなく、古代ギリシャ以来、いろいろな国が離合集散を繰り返してきたわけですが、神聖ローマ帝国の国歌などというものは、きいたことがありません。ここで深入りする余裕はありませんが、世界の国歌の歴史を調べてみれば、そのほとんどが18世紀後半以降、19世紀にはいつてからの制定であることがわかるでしょう。その先鞭をつけたのは西欧諸国ですが、今やおよそ世界中の国と呼ばれる存在で国歌がないなどということはあり得ないような状態になっています。校歌に関して、日本の学校では、ある時期から急速に普及し、間もなく学校に校歌がないなどということはあり得ないような状況になってゆくのですが、なんだかとてもよく似ていると思いませんか？

この18世紀後半から19世紀にかけての時代は、西洋の音楽や芸術の歴史を専門とする者にとっては、芸術の「自律化」の時代としてイメージされることが一般的です。教会や宮廷との関わりのなかで、典礼や社交といった外的な目的と結びつくことでしか存在意義を認められていなかった音楽や芸術に、純粹に鑑賞する作品としての「芸術的」価値がはじめて認識されるようになり、美術館、コンサートホールといった、その種の社会的なしがらみから自由になった制度、場が確立し

た、そんな形で捉えられてきました。もちろん、それが全く間違っているなどというつもりはありませんが、そのような、音楽や芸術が「純粋化」され「脱政治化」されてゆく側面ばかりをみてしまうと、この時期の西洋文化に起こっていた、もうひとつの重要な側面を取り逃してしまうことになりかねません。なぜなら、この時代は同時に「コミュニティ・ソング」が高度に発達するなか、音楽の「政治化」が高度に進んだ時代でもあったからです。

西欧諸国のみならず、アフリカや南アメリカなど非西欧圏の諸国でも国歌を制定する慣習が確立し、しかもそのほとんどの国で、各国の伝統文化とは関係のない西洋音楽スタイルの国歌が作られたことに示されているように、この「コミュニティ・ソング」の思想と実践は、18世紀後半から19世紀にかけての西欧地域を震源地として、その後の時代に世界各地へと伝播してゆきます。

(出典 渡辺裕『校歌斉唱！ 日本人が育んだ学校文化の謎』、新潮社、2024年より、一部改変。)

設問1 著者によると、校歌や国歌のような歌は何と呼ばれ、どのような動きと関わっているか。120字以上160字以内で述べなさい。

設問2 共同体を形成する上で、音楽はどのような役割を持っているか。具体例を挙げながら700字以上800字以内であなたの考えを述べなさい。

渡辺裕著『校歌斉唱！ 日本人が育んだ学校文化の謎』（新潮選書刊）